

バナナと革命

梅津 時比古

(桐朋学園大学学長・ジャーナリスト)

バナナの価値観で世代が分かるのは事実である。高齢の世代の思い出しには、子供の頃、バナナが、黄金色した甘美な夢のような果物、いや果物を越えた宝物に見えた記憶があるに違いない。かなり大きくなってからも、バナナはとても高くて、たやすく買えるものではなかった。

幼稚園の遠足で、私にとって最初の衝撃が起きた。楽しみにしていたバナナを出すと、草っ原の隣に座っていたおとなしくて弱い男の子が、バナナを見ている。じつと、いつまでも見ている。それまで話したこともない男の子だったが、とてつもなく可哀そうになった。「あげるとバナナをその子に差し出した。いきなり

「いらないッ」と思いも掛けぬ強い声が返ってきた。

そのとき刻みつけられたのは、可哀そうと思つたら、はねつけられる、ということであった。

食べ物に関しては、中学のときにも似たような思い出が残っている。3列前に、貧しい家の男の子がいた。当時は親も誰もが平気で「貧しい家の子」とか「お大尽の子」などと言っていた。そして貧しい家の子はたいがい勉強ができない、と子供たちの間では常識になっていた。ひとり、お弁当に豪華な海老フライなどを持つてくる男の子がいた。私が食いしん坊のせい

か、いいなあ、とうらやましがっていると、一人の女の子から「あの子の親は離婚していてお

梅津 時比古（うめづ・ときひこ）



神奈川県鎌倉市生まれ。一九七一年に早稲田大学文学部西洋哲学科卒、毎日新聞入社。一九八二〜八三年、ドイツ・ケルン音楽大学で研修。帰国後、学芸部でクラシック音楽を担当。

『セロ弾きのゴーシュ』の音楽論』で芸術選奨文部科学大臣賞および岩手日報文学賞賢治賞。NHK制定「日本の100冊」に『ゴーシュ』という名前』が選ばれる。『フェルメールの楽器』などで日本記者クラブ賞。二〇一九年にドイツで『冬の旅 24の象徴の森へ』が翻訳出版され、ゼミナールも開かれた。現在、桐朋学園大学学長、毎日新聞特別編集委員。

母さんが結婚式場に勤めているから、式場の残り物の食べ物を持ってくるんだよ」と、さげすんだような口調で情報が流れてきた。

赤い長い髭がはみ出した海老フライが目をはくだけに、三列前の貧しい家の男の子がいつもほとんどおかわりがないノリ弁当であることも目に付いた。その子がある日、昼食の時間、お弁当の蓋を開ける前に振り返って、みんなに「今日の僕のおかずはなあんだ？」とクイズを出した。いつも「ノリ弁」とみんな知っている。黙っている、一人が「ノリ弁だろ」と吐き捨てた。それを待っていたように、貧しい家の男の子は「はずれ！ 肉だぞ！」と弁当の蓋をあけてみんなに見せた。ノリ弁の横に、縮んだ焼き肉のようなものに乗っていた。私は不意に、自分がないか悪いことをしているような気持ちになつて、いろいろおかわりが詰まっている自分の弁当を、泣きそうになりながら食べた。

ここ数年、ジェンダーやハラスメントなど、社会に巣くう差別が洗いざらい点検され、追及されている。私が社会に出た一九七〇年代は、今では信じられないような言動に満ちていた。

鮮烈に覚えているのは、大学に新聞社の就職担当の男の人が来て説明会を行ったとき、女子学生の中の一人が「女性も入社試験を受けてもいいでしょうか？」と質問したことである。担当の人はやや沈黙を置いて「受けるのは自由だけど、合格することはありません」と答えた。会場には少し笑い声が上がったが、それだけだった。私も苦笑した覚えがある。今だったら、大変なことである。

新聞社に入社して数日目に大手町のビジネス街の喫茶店で見た光景も衝撃的であった。何人かで上の人に連れられて雑談しているときふと目にしたのだが、違う席から立ち上がってレジに行く紳士が、ウエイトレスの横をすり抜けざま、尻をむんずとつかんだのである。ウエイトレスは別に声も上げなければ、逃げもしなかった。私は「大人の社会ってこんななんだ」と本当に驚いた。

考えてみれば、ここ数十年を除けば、洋の東西を問わず社会に差別があるほうが普通であった。阿部謹也によれば、差別のつぼと言える中世ヨーロッパの法律書には、字が読めない一

般人のために絵で描かれた社会の序列も掲載されており、そこには神、教皇、司教、修道院長、修道尼、司祭、皇帝、国王、領主、裁判官、市長、村長、農民、封臣、牧人、ザクセン人、ヴェンド人（スラヴ人）、ヴェンド人の女、ユダヤ人、など細かく序列・差別の周知が徹底されている。しかもこの序列は、一応、身分を与えられている者の身分上の差別であって、ヴェルナー・ダンケルトによると、社会としてはさらにその下に、身分をも構成し得ない被差別者が居た。その最下層は、死刑執行人、墓掘人、夜警、煙突掃除人、道路清掃人、森番、羊飼、動物の皮はぎ人、牡の家畜の去勢人、亜麻布織工、れんが製造工、浴場主、娼婦、奇術師、遍歴楽士などである。もちろん、職業を変えることはできず、最下層の人々は、生まれたときから洗礼証明書に不浄と烙印を押され、結婚や法的諸権利について厳しい差別を受けた。それはゲート、ベートーヴェンの時代の一九世紀の社会に至るまで続き、名残は今もある。私たちが堪能している文化、芸術の底に横たわっている差別を見据えることは重要であろう。

バナナやお弁当の出来事を思い出すと、寂しさと優しさの感情がまつわりついてくる。差別と孤独の錯綜した実感、認識であろう。人はまず、自分と違うという区別によって他者を認識し始める。そこに価値観が付加されると社会が構成され、差別となる。

現代における差別解消の動きは、単なる社会現象ではなく、歴史上の大革命であるに違いない。